キルギスタンの叙事詩『マナス』と辺境の知識人

奥　村　剋　三

1．キルギスの叙事詩『マナス』

「キルギスタンで過した私の青春の年月には，終ることない叙事詩の，有名な語り手――『マナスチ』たちが健在だった。少なからぬテレビ放映時間が毎週，こうした巨人たちの最後の一人サヤクバイ・カララエフにあたえられたものだった。彼はこの叙事詩の，百万をこえる詩行を記憶にとどめていた。テレビ・スタディオでも屈託なく，堂堂とふるまう彼。昔，人びとに誉めそやされたマナスチの誰かれ，それらマナス語りの，今は自分も老いさらばえてしまった弟子であるこの人が叙事詩『マナス』の諸章をうたっていた。だが彼の師たちもまた，その先人たちの弟子だったのだ。心を魅する率直さでサヤクバイは即興の歌詞をはさむ……。長時間，倦むことなく，飽くことを知らぬ彼の声がひびいていた。ときに鈴をころがし，時には吼える。唸るかと思えば，足ふみならす。低声にささやくこともあれば，高らかに唱うこともあり，鶯のようにうたい，時には口籠るように，嘆息をきかせた。歓喜に雀躍し，悲愁にうちしおれる……[1]」。以上の引用は1995年夏，ロシアの週刊紙『文学新聞』にのったミハイル・シネリニコフの「民衆がマナスを忘却から救った」という記事の冒頭部分である。キルギスタンは中央アジア，天山山脈北麓のキルギス人たちの国である。シネリニコフの文章には，この国の現代詩人たちの一人が語った「ぼくたちキルギス族は二つの絶品をもっている。イシク・クリ湖と『マナス』だ！』という言葉がしるされている。『マナス』はキルギスタンの古い長大叙事詩であり，かつて文字をもたなかったキルギス人たちはこの叙事詩を，語り部ならぬ，吟唱歌人（マナスチと呼ばれた）の世世代代の伝承芸能で守りつたえてきたのである。前述の記事の中央には，別囲いでウラジーミル・ソロウーヒンがキルギス語からロシア語に訳した『マナス』の一部が添えられていた。そのまた，ごく一部を紹介すると，

選りぬきの馬どもに鞍が置かれた
怖れを知らぬ勇士たちがそれに乗る。
かれら全員の眉は漆黒だ
かれら全員の歯は純白だ
皓歯をきらめかせて勇士たちは哄笑する
山山に地すべりの音が轟くように。

勇士たちの隊列の先頭を
二人の英雄が仲睦まじく騎り行く。
獅子のようなマナスは愛馬に跨り
アルマムベトは愛馬にまたがる。
鎧には鎧が触れ合い
袖には袖が触れ合う。[2)]

かつて敵として闘ったマナスとアルマムベトが和睦した。今，二人の豪傑は駒をならべて軍勢の先頭を進む。その晴やかな情景がうたわれている。叙事詩の題名にもなっているマナスとは，キルギス族の英雄なのである。

このキルギスの民間口承英雄叙事詩はマナスチ（『マナス』唱い）の記憶によってうけ継がれてきたが，1922年に，10月革命後に中央アジアに成立したトルケスタン共和国の文部人民委員部の委託で採録が始められた。このとき『マナス』を吟唱したのはサグィムバイ・オロズバコフで，18万行を優に越す詩行をうたったといわれている。この採録は1926年に完了した。サグィムバイは1867年にイシク・クリ峡谷で生まれ，16～17歳からうたいはじめた。光彩陸離たる戦闘（一騎討ちをふくめて）場面の描写，ファタジーに充ち満ちたエピソード展開，きわだった抒情性で知られた彼の歌唱は，しかし，彼自身が宗教的な人柄だったこともあって，きわめてイスラム教色が強く，汎チュルク主義が目立った。そのため中央アジアの民族主義者たちに利用され，彼らの慫慂で，即興でマナスがロシア英雄叙事詩のヒーローであるイリヤ・ムーロメツと闘ったり，はてはナポレオンとマナスが闘ったといった即興詩行を挿入したといわれる。サグィムバイは1930年になくなった。

拙文冒頭の引用にでてくるサヤクバイ・カララエフはサグィムバイより4半世紀ほど後れて，1894年に生まれている。筆者がマナスチたちの情報をえたのは，「マナスチたちの創作」と題する論文で，著者はラフマトゥルリンという人である。この論文は著者が学位請求のためモスクワ大学に提出した後，急逝したため審査が行われなかったのを惜しんで，『マナス』研究論集に収録されたものである。ラフマトゥルリンは，サグィムバイとサヤクバイのうたった『マナス』の採録テキストを，帝政時代にロシア学士院会員ラドロフが氏名不詳のマナスチから採録したテキストと比較し，それぞれのバリアントのエピソード配列を表にまとめた。三つのバリアントのうち，最も簡略なるものはラドロフ採録のもので，①マナスの誕生，②アルマムベトの遠征，③コクチョとの闘い，④マナス，カヌイケイ姫と結婚，⑤コケテイの追善武芸大会，⑥キョスコマンの陰謀，⑦マナスの死と，その子セメテイの誕生，の7つのエピソードから成り立っている。これに対しサグィムバイの場合，マナスの誕生と幼時を語るエピソードにはじまり，カシュガル，中央アジア，アフガンなどとの闘いの後，6番目のエピソードとしてマナスの結婚があり，また北へ，西へと遠征のあと，13番目のエピソードとしてコケテイ追善武技大会がでてくる。その後，15番目のエピソードで北京大遠征が語られ，18番目のエピソードでマナスの死となる。サヤクバイの構成では，マナスの結婚は14番目のエピソードとなり，16番目のエピソードで大遠征とマナスの死を語り，17番目ではマナスの妻のブハラへの逃亡が語られ，これで終る。[3)]『マナス』は以上の比較からもわかるように，歌い手毎に，さまざまなバリアントがあった。長い伝承の過程で，さまざまな語り手が新しい要素を加え，即興の導入が変化を生み，生物のように成長してきた不

思議な叙事詩といえるだろう。

『マナス』のクライマックスは北京への大遠征である。（もちろん，歴史上，このような出来事があったことはなく，研究者によっては，これを8世紀ごろのウィグル族のクトゥルクボイラ（骨力裴羅）をカガンとした遊牧国家トグズオグズを，9世紀にキルギス人とキプチヤク人が連合して亡ぼした史実を変型したものと見たり，あるいはずっと後代の19世紀第1四半期のムスリム大ホージャ，ジヤアンゲル・ハンの反清暴動が反映したものと見る[4]）。この仮空の北京遠征譚が招いた『マナス』の災厄について，前記「文学新聞」の記事が語っている。それは旧ソ連邦のスターリン時代，中華人民共和国との蜜月の頃である。『マナス』は政治的に具合の悪いものとなる。なにしろ，『モスクワ—北京』が高らかに歌われた時期である。北京大遠征など，とんでもないという訳だ。しかし叙事詩『マナス』から大遠征の章を削除できるだろうか。キルギス共和国の最高権力と共和国科学アカデミー幹部会との合同会議がもたれた。『マナス』擁護派は陳弁に努めた。そもそも『マナス』には中国人民への敵意はない。キルギス人にあんなに愛好されている人物の一人は，恋人との痛切な別離を経験した勇者，魔法使で真実探求者アルマムベトであるが，彼は中国人である……。全体としてみて，このキルギスの叙事詩は驚くほど国際性に富んでいる。そこで活躍しているのはタジク族の姫カヌイケイ，中国娘ブルルチャ，カザフ人コクチョ，その他天山と大草原のさまざまな種族の人びとである。……『マナス』擁護派の弁論は成功した。会議の首尾を心配して，この日，科学アカデミーの建物を囲繞した数千の騎者たちは，『マナス』の大合唱とともに故郷のアイール（村落）へ戻っていったのである[5]。

前記ワシーリー・ワシーリエヴィチ・ラドロフ（1837—1918年。もともとはベルリン生まれのドイツ人で，ドイツ名フリードリヒ・ウイルヘルム）は1862—1869年に『マナス』，『セメテイ』，『セイタク』の三世代にわたるキルギス叙事詩のうち，12,454行を採録した。彼の採録した『マナス』はかならずしも正確・完全なものではなかったが，それでも自分でドイツ語訳を付して公表した。またヨーロッパでつとに識者の評判をとった著書≪Aus Sibirien≫（1884年）の中でも紹介したので，彼は『マナス』の初期の発見者と見なされているが，彼より早く，1856年にイシク・クリ湖の近くでこの叙事詩の一部を採録したカザフ人がいた。しかしそれは1904年まで公表されなかった。このカザフ人は，チョカン・ワリハノフである。

2．チョカン・ワリハノフ

小江慶雄，小林茂両氏が訳されたピーター・ホップカークの『シルクロード発掘秘話』にはタクラマカン砂漠一帯のオアシス都市や周辺遺跡を探検したヘデイン，スタイン，ル・コック，ペリオ，大谷探検隊などのことが興味ふかく記述されている。ところがこの書では，同じようにこのあたりを探査したロシア人プルジェヴァルスキーについてはほとんど述べられていない。そのことは後書きで訳者も指摘している[6]。ニコライ・ミハイロヴィチ・プルジェヴァルスキー（1839—1888）は中央アジアを4度にわたって探検し，黄河，揚子江の源流や，ロブ・ノール，チベットを踏査した。1888年，サマルカンドを経由し，中露国境へむけ5度目の探検行にむかう途中，風邪をこじらせ病没した。イシク・クリ湖のそばのカラコルの町でのことで，そこは1893年，こ

の大探検家を顕彰してプルジェヴァルスクと改名された。ロシア最大の探検家が眠るこのセミレーチエ地方を，彼よりも早く，1856年にロシア軍の探察隊の通訳として探査したのがチョカン・ワリハノフである。彼はこの旅の様子を「イシク・クリへの旅日記」に記録した。

チョカン・チンギソウィチ・ワリハノフは19世紀中葉にごく短期間活躍した傑出したカザフ人学者である。1835年に，今日のカザフスタンのコクチェタフ州アイルタウ地区で，名門スルタン，チンギス・ワリハノフの息子として生まれた。父の祖父にあたるアブライは，17世紀から18世紀にかけて3つのオルダ（部族集団）に分かれていたカザフ人のうち，北部草原にいた中オルダで勢威をふるったスルタンとして著名である。18世紀中葉，バルハシ湖からシル川流域にかけての地域を占めた大オルダは，東から迫るジュンガール・ハン国の圧力をうけて衰微し，危険は中オルダにも及ぼうとしていた。狡智にたけたスルタン・アブライはジュンガールと清帝国との抗争を巧みに利用しながら独立を守った。その一方，ロシアで1741年にエカテリーナ2世が即位すると臣属を誓約し，同時に清への藩属を止めなかったという細心周到な機略を弄している。チョカンの父の代にはカザフ人の地はロシアに従属していた。父のチンギスはロシア風の教育をうけた。1834年，オムスクのシベリア前線コサック軍学校を卒業，主にシベリア・カザフ統治機構の役職をつとめ，ロシア陸軍の大佐として勤務を終えた。彼はロシア官吏，士官，学者などと幅広く交際し，モスクワやペテルブルグの人類学博覧会にむけ，カザフ人の民俗を示すさまざまな物品を送ったりもした。そんな父親をもったから，チョカンは幼年期から知的生活，精神的関心への嗜好をつよめた。幼年時代のチョカンに大きな影響をあたえたのは祖母のアイガヌイムだった。彼女の口からカザフ人の歴史，伝説，民話，詩歌はチョカンの心に滲透し，彼に民族精神への覚醒をうながした。

1853年，チョカン・ワリハノフはシベリア幼年学校を卒業，その直後に西シベリア総督ガスフォルト将軍の副官に任命される。そのことがチョカンに西シベリア，中央アジアの政治，外交，経済の現況を教えることになる。彼は未知の土地，民族，人種を研究したいという夢をふくらませる。彼は軍務のかたわらカザフスタンや，中央アジアの歴史に関する文献資料を収集，研究し，カザフのことわざ，俚言をロシア語に翻訳した。

1856年，陸軍中尉チョカン・ワリハノフはキルギス北部探検隊長ホメントフスキー大佐の指揮下に入り，通訳としてこの隊に同行することになる。旅はチョカンの学問研究に有益なるものとなった。二ケ月間，カラ・キルギスの地にあった間に，主としてキルギス族の言語と伝説を研究した彼は，さまざまな有益な情報を集めることができたと書いているが，チョカンが残したコレクション，スケッチ，日記は今日でもなお，キルギスタンの過去の地誌，民俗誌，歴史の第一級資料の価値を失っていないといわれている。この旅でワリハノフはキルギスの英雄叙事詩『マナス』の断章を採録し，それをロシア語に翻訳したのである。

ワリハノフには「ジュンガリア報告」という中央アジアに関する記録がある。その中で黒キルギスと呼ばれる今日のキルギス人の由来を古伝説や中国史料などから推定している部分がある（ちなみに，ワリハノフ存命の時代，カザフはキルギス・カイサクと呼ばれ，現在のキルギスタン一帯はカラ・キルギス=黒キルギスと呼ばれた）。ワリハノフはキルギス人の故地をアンジャン山脈だとしている。シベリアから移ってきたという伝説は彼らの間には存在しないが，キルギス人の遊牧地はイルティシュ，アルタイ，ハンガイ，さらに東はウルムチに達していたとする言い伝えはあると

いう。こうしたキルギス人の伝承を検討するうち，「さまよう神話」がアジアにもあって，キルギスのステップにもサイクロップ（一つ目の巨人）の神話そっくりのものがあるという。

こうしてワリハノフはキルギス人の唯一の叙事詩『マナス』に話を移していく。

> マナスはあらゆるキルギス神話，民話，伝説のエンサイクロペディア的集積である。それらを一つの時代に集め，一人の人物・勇者マナスの周りに凝縮したものといえる。これはある種，ステップのイリアッドのごときものである。キルギス人たちの生活様式，習俗，道徳，地理，宗教観，医学知識，そして彼らの国際関係がこの巨大な叙事詩の中に反映している。われわれの見解では，この物語詩は最近時に追加と変改を蒙ったことは明らかだ。おそらく，バラバラな多くの話を一つの統一体に構成したこと自体，最近時の仕事であるにちがいない。[7)]

ワリハノフはもう一つ別の叙事詩『サミャチェイ』（『セメテイ』のこと）にも言及している。それを『マナス』の続篇と見なし，「これはブールート（キルギス）人のオデッセイである」といっている。そして「キルギス人たちの語るところでは，『マナス』を聞き終えるには三夜では不足だ。そして『サミャチェイ』にも同じくらいの時間が必要だというが，これは誇張がある[8)]」といっている。

マナスはチュー川からタラス川にいたる地のノガイ人の支配者とも，また別のところではアンジャン（12世紀頃のフェルガナ国，のちのコーカンド汗国の首都）の人だともいわれ，時にはタジクの遊牧民を意味するサルトゥイだともいわれる。いずれにせよ，系譜の上ではチンギス汗の末裔とされる。ワリハノフはまた，この英雄を冷酷で官能的なステップ人だとも性格づけている。

こうした記述を読んでいくと，今日，明らかになっている『マナス』の全容をワリハノフはほゞ知っていたことがわかる。彼の理解では「『マナス』の中で最高の傑作部分はコクタイ・ハンの追善武技大会の場面である」。ワリハノフはいう。「物語詩『マナス』の一つのエピソード，つまりコクタイ・ハンの追善武技大会の場面は私がキルギスの吟遊詩人のことばから採録した。おそらく，これは紙の上で伝えられた最初のキルギスの言葉であろう。私はキルギスの詩作品の翻訳にとりくみ，今日まで未知の言葉を東洋学者に知らしめるため，小辞書を編んだ[9)]」

ワリハノフはこの後，カザフの民間口承伝説や口碑詩などの研究にも取組む。おそらく彼は，中央アジアのチュルク系諸人種の歴史解明のための資料としてこうした口承伝説を使い，人種の発生，イスラム教の役割，社会制度などを学問的に究明するいとぐちをつけた最初の人であろう。キルギスの叙事詩『マナス』の採録はワリハノフを中央アジアの過去の研究に導いた。その視野には中国領東トルケスタンも入ってくる。「清帝国の西域とクリジャ（中国名は伊寧）の町」，「1858—1859年のアルトゥイシャル（ないしは天山南路の中国辺境，六つの東方都市）の状態について」といった文章が残っている。

3．辺境の知識人の立場

1856年のキルギス北部地方への旅はワリハノフには実り多いものとなった。この旅の記録は「イシク・クリへの旅」という日記体の文章になっているが，それ以外にも当時のイリ川流域のカザフ人，キルギス人の状況をつたえる「トランス・イリ地方の地誌」，「キルギス・カイサク大

オルダの伝説・伝承」といった報告もある。キルギス地方の一連の地誌的研究は地理学者P・P・セミョーノフ（チャン・シャンスキー）や経済学者Ye・I・ラマンスキー（この人はロシア地理学協会の書記でもあった）の注目をひき，彼らの斡旋尽力で，チョカン・ワリハノフはその後，ロシア地理学協会の正会員に選ばれている。

1856年の夏の終りから数ケ月間，ワリハノフは今度はロシア外交使節団の一員としてクリジャ（伊寧）で清国との通商交渉にあたる。前記「清帝国の西域とクリヂャ」には，交渉相手となったこの地の中国人マンダリンの華美，飽食，腐敗ぶりが皮肉たっぷりに描かれている。帰国したワリハノフは，18世紀，19世紀はじめの露清関係や，中央アジアの政情とその背景を調べるためにオムスクの古文書庫で虫喰いだらけの文書，記録，政令，報告，密告など渉猟する。

1857年から58年にかけて，ワリハノフはその頃セミパラチンスクに追放になっていた作家ドストエフスキーや，同じくペトラシェフスキー党の一員S・F・ドゥーロフと親しく交際した。彼は思想的にはゲルツェンやベリンスキー，ドブロリューボフやチェルヌイシェフスキーといった，当時のロシアの進歩派に近い立場にたっていた。旧ソ連時代のワリハノフ観に特徴的な，民主主義者，啓蒙思想家という像はここから生まれたものだろう。それはロシア知識人の多くと同一歩調をとるカザフ人知識人のイメージを強調する。

同じ頃のロシア文学に目をむけると，『ルーヂン』（1856年），『貴族の巣』（1859年）と余計者タイプの貴族知識人を描いているツルゲーネフがいる。彼が1862年に発表してロシア社会に衝撃をあたえた『父と子』にはロシア知識人の一典型バザーロフという人物が提示されている。エドワード・サィードは「1993年リース講演」で行なったレクチュアー≪Representation of the intellectual≫（邦訳『知識人とは何か』大橋洋一訳）で，「近代の若き知識人」，「周囲と摩擦を起こしそうな一風変ったライフ・スタイルの代表者」として，このバザーロフをとり上げる。

> バザーロフは日常的な約束ごとを踏みにじり，凡庸なことや紋切り型を嫌い，科学的で感傷的でない新しい価値観を擁護し，それらを合理的で進歩的な価値観として主張する。[10)]

サィードはこのバザーロフのほかに，ジョイスの『若き日の芸術家の肖像』のスティーヴ・ディーダラス，フローベルの『感情教育』のモロー，などをとりあげ，19世紀小説がしめす知識人の悪戦苦闘から次のような知識人のイメージをとりだす。

> 知識人の表象とは，懐疑的な意識に根ざし，たえず合理的な探求と道徳的判断へと向かう活動そのものである。[11)]

このような知識人の表象に照らしてみると，チョカン・ワリハノフは中央アジアの後進性からくるさまざまな偏見とたたかい，科学的精神に基づいて合理性を自分の周辺にひろげようと努力した知識人といえるのだが，それだけにとどまらない微妙にちがった影がみえてくるのは，彼が非ロシア人の，つまり周辺の知識人であるからだろう。そのことをたしかめながら，もう少し，『マナス』の発見者の生涯をたどってみよう。

1857年，東トルキスタンで，10年ほど前にカシュガルで反乱を起したホージャ（イスラム教徒の貴族）の子供たちが，また反清暴動にたち上った。ロシア政府はカシュガルの状況を詳細に把握し，政策立案に役立てる必要を感じた。かつてのイスラム教徒王朝への人びとの同情，暴動の規模や勢力の程度，反乱が成功する可能性，などを正確に知りたいという思惑から，カシュガルへ学術調査隊を派遣する話が官辺筋にもちあがった。地理学者セミョーノフは，目下発生してい

る暴動の実態，さらには東トルキスタンの今後を解明する貴重な情報をもたらすことができるのは，チョカン・ワリハノフをおいて，他にないと彼を推挙した。

1858—59年のカシュガル行はワリハノフ生涯最大の出来ごとだった。商用キャラバンに同行したワリハノフは，商人アリムバイの偽名で1858年10月２日にカシュガルに到着した。それから，1859年３月11日までの間，同地に滞在して精力的に政治，経済，民情，人種問題などの情報を収集した。彼はこの旅から貴重な古文書類，めずらしい鉱物，中世の古銭，植物標本を持ち帰っている。これはまさしく探険と呼ぶべきものだった。1865年のロシア地理学協会報告には，「この旅はマルコ・ポーロの時代以来の驚嘆すべき地理学上の壮挙である。この町で殺された不運なアドルフ・シュラギントワイトを例外とするならばの話だが。この出来ごとについても，ワルハノフははじめて信ずるにたる情報をもたらした[12]」とのべられているが，危険を冒しての探検行でもあった。

1860年，彼はロシア帝国の首都ペテルブルグに転じ，外務省アジア局勤務となる。参謀本部や大学の講義にも顔を出し，地理学協会で何度か，報告をおこなった。またアジア局付置高等学院でチュルク諸語を教え，中央アジアの地図作成の仕事にも参加，充実した学究生活をおくった。しかし宿痾の肺病が彼を，1861年春に故郷の両親のもとへつれもどしてしまった。

1864年春，カザフスタン南部を劫掠したコーカンドの領主たちを討伐するチェルニャーエフ大佐指揮するロシア軍に参加するが，チェルニャーエフの住民に対する残酷な仕打ちに憤慨して軍を去った。親戚の長老スルタン・テゼクの村へ去り，そこから新疆の非漢人種族の民族解放闘争を注視した。「ルースキー・インヴァリード」紙（1865年，No. 51）に西域のドンガン（東干）の乱についてワリハノフが書いた記事が載ったが，これが彼の絶筆となった。チョカン・ワリハノフは1865年４月10日に病没した。

短命だった彼の生涯の最期の時期に，この「周辺の知識人」の意識におこった変化に注目したい。この時期，ワリハノフは病魔とたたかいながらフォーク・ロアの収集に従事し，故郷カザフスタンの富裕層の専横と暴力，一般の人びとの蒙昧と迷信とに果敢にいどもうとした。彼は自らアトバサル管区の長老スルタンになろうとしたが，そして改革をおこなおうとしたが，西シベリア総督・知事デュカメリら，ロシア政府の地方官僚に阻まれて望みを達することができなかった。彼の民主主義的な思想傾向がオムスクの官吏たちの忌避するところとなったのだろう。知識人チョカン・ワリハノフは帝制ロシア官僚の保守的尊大と，自らが理解の手をさしのべようとした中央アジア民衆の無理解と敵意の中に，孤独の憂愁を味わうのであった。彼は「すべてを中心化する権威的体制から離れて周辺へとおもむく[13]」非妥協的姿勢を貫く。

そのことを示す文書として，この時期，彼がカザフスタンの裁判制度改革に積極的に参加し，その過程で自分の考えを前記デュガメリ総督に提出しようとして執筆した「裁判改革についての覚書」がある。その中に次のような考えが述べられている。

> ロシアはその息子たちの数のうちに，少なからぬ異教徒，異人種を抱えている。かれらは基幹ロシア住民の生活様式とは真向から対立する生活様式をもち，スラブ種族のロシア人の道徳，習慣とは真向から対立する道徳，習慣をもつ。キリスト教徒で定住民のロシア人住民のために企画された改革は，もしもそれらをヨーロッパ・ロシアならびにアジア・ロシアの遊牧漂泊の異人種に全面適用するようなことになれば，上記の理由により，いかなる利益も

もたらさず，無意味なものとなるだろうことは明白だ。[14)]

カザフ人たちのあいだには「ビイー」と呼ばれる，半ば世襲制で維持されてきた裁判官がいた。ロシア政府はこのビイー制度を廃止し，ヨーロッパ・ロシアと同じ近代的裁判制度をカザフに持ちこもうとしていた。ワリハノフはこの企てに反対だった。ビイーは単に民衆に選ばれた裁判官というより，人びとの日常生活，慣習の隅々まで知りつくしたリーダーなのである。過去の膨大な事例を記憶にたくわえ（そのため世襲制も残されている），事の是非善悪を周到に判断する判官なのである。それは現実に有効に機能しているカザフ独得のシステムであって，人びとの信頼も厚い。現にビイー制度を廃止し，ロシア式裁判官制度の導入に賛成しているのは，ロシア地方官僚と癒着した富裕上層カザフ人だけで，貧しい多くの民衆はビイーたちに正義の具現者を見出し，ビイー制度廃止に反対なのである。このようなビイー制度を古い仕来りだからといって簡単に廃止してよいものか，どうか。ワリハノフはそのように考えた。

> どのような改革にせよ，それを植えつけ，保持するためには，改革がその利益のために企てられた当の社会の民族的特徴に適合したものであるべきだし，その物質的必要に応えるものであるべきだ。[15)]

ワリハノフにはヨーロッパ追随型の「進歩」とは異なる社会改革の可能性が見えていたのだろうか。ワリハノフは中央アジアの人間であり，その自覚が深まれば深まるほど，一見進歩的に見えるロシア政府の行政が植民地支配の論理を秘めていることに気づいたにちがいない。そのことはチェルニャーエフ軍の行為に同調できず，軍を去った彼の行動と無縁でない。ロシア陸軍二等大尉チョカン・ワリハノフからカザフ知識人チョカン・ワリハノフへの変貌が，この先どのように進んでいくのか，どのように自分の姿を見なおしていくのか，は大いに興味のわくところだが，惜しいことに，あまりにも早い死が，この「辺境の知識人」の運命の展開を中絶させたのである。

筆者には，チョカン・ワリハノフとキルギスの壮大な叙事詩『マナス』との出会いが，晩年の彼の行動と思想的営為を生むことになったと思えるのである。叙事詩『マナス』が物語る英雄たちのたたかい，遊牧民の生活習俗，信仰，神話と夢，イスラム信仰の表層の下から顔をのぞかせる草原人の官能と情感，これらすべての「エンサイクロペディア的集積」が，ワリハノフに同時代ロシア知識人とは一風ちがった世界観をもたらした。そのことが草原の知識人の自覚につながったと考えるのである。

注

1）「文学新聞」1995年8月30日号。

2）同　上

3）キルギス共和国科学アカデミー・言語文学研究所『マナス，キルギス民族の英雄叙事詩』フルンゼ，1968年。
　ラフマトウルリン「マナスチの創作」は75～146頁。

4）同上書「キルギスの叙事詩『マナス』発生の時代」（ベルンシュタム著，初出1946年，改訂1948年）153～175頁。

5）前掲『文学新聞』。

6）ピーター・ホップカーク　小江慶雄，小林茂訳『シルクロード発掘秘話』時事通信社，昭和56年。

7）チョカン・ワリハノフ選集　モスクワ，1986年。288頁。

8）同上書　288頁。

9）同上書　289-290頁。

10）エドワード・W・サイード　大橋洋一訳『知識人とは何か』平凡社，1995年，38頁。

11）同上書　45頁。

12）前掲チョカン・ワリハノフ選集。序文　8頁。アドルフ・シュラギントガイトについてはワリハノフの「ジュンガリア報告」に「首を斬り落され，その首は刑死人の首でできている塔の上に据えられていた」と記述されている。267頁。

13）前掲サイード。102頁。

14）前掲チョカン・ワリハノフ選集。318-9頁。

15）同上書　334頁。

参考文献

1）『草原とオアシス』山田信夫。≪ビジュアル版≫世界の歴史，第10巻。講談社。

2）河出文庫『世界の歴史10，西域』羽田明ほか。1989年。

3）『中央アジア史研究』羽田明。臨川書店，昭和57年。